

週刊 **少年**

# マガジン

はどのように  
マンガの歴史を  
築き上げてきたのか？

1959-2009 伊藤和弘

週刊

# 少年★マガジン

の歴史は、マンガの歴史  
そのものである！

ちばてつや、川崎のぼる、朝基まさし、樹林伸 ……

〔あしたのジョー〕

〔巨人の星〕

〔サイコメトラ-EIJI〕

〔金田一少年の事件簿〕 原作

レジェンド、そして歴代編集長の **貴重な証言が一堂に！**



「週刊少年マガジン」はどのように  
マンガの歴史を築き上げてきたのか？

1959  
2009

伊藤和弘

星海社

228



SEIKAISHA  
SHINSHO



コロナ禍による巣ごもり需要も追い風となって、マンガが大きく売り上げを伸ばしている。出版科学研究所によると紙と電子書籍を合わせたマンガの2021年の推定販売金額は6759億円であり、2年連続で過去最高を更新。出版市場全体では実に40・4%のシェアを占めて、ついに4割を超えたと話題になった。

言うまでもなく、日本は世界一のマンガ先進国だ。欧米発祥の「コミック」や「バンドデシネ」と区別したMANGAという言葉も、すでに広く認知されている。

日本のマンガがまだ世界に知られていなかった頃、「電車の中で大人がマンガを読んでいる」ことに驚いた欧米人が少なくなかった。日本人が幼稚だったわけではない。それこそ文化の違いであり、日本が誇るマンガは当時から文学や映画と肩を並べるクオリティを持っていたわけだ。20年近く前、筆者はパリの地下鉄でフランス語に訳されたMANGA（るろうに剣心）を熱心に読みふけている青年を見たことがあるが、日本人としては何も驚

くには当たらない。ちなみに2021年1～8月のフランスにおけるMANGAの売り上げは約2900万部で、前年同期比の2倍に伸びたという。

そんな日本でも、かつてマンガが「子ども向けの娯楽」に過ぎなかった時代があった。それがどうして大人の鑑賞に堪えるまでに進歩したのか。「手塚治虫がいたからだ」という名言もあるが、それだけではないだろう。映画的手法をはじめ、ストーリーマンガの基礎を築いた手塚の功績は確かに比類ない。しかし1950年代までの手塚マンガの読者は、あくまで少年少女に限られていた。

最大のきっかけは、当時小学校高学年になっていた団塊の世代を対象に1959（昭和34）年に生まれた『週刊少年誌』の登場である。

週刊少年誌はたちまち月刊誌を駆逐。熾烈な競争の中、団塊の世代の成長に合わせてテーマ・表現とも文芸作品と肩を並べるまでに進化し、やがて青年や社会人に向けたマンガ誌をも成立させる土壌を築いていった。

中でも「週刊少年サンデー」（小学館）と並んで最長の歴史を持ち、『巨人の星』や『あしたのジョー』といった「大人も夢中になるマンガ」を生み出した「週刊少年マガジン」（講談社）が果たした役割は極めて大きい。

「少年マガジン」が生まれて60年余り。同誌の歴史はそのまま少年マンガの歴史であり、この間に少年マンガがどのように変遷・発展したのかがよくわかる。本書では多くの文献を参考にしつつ、同誌で活躍した人気マンガ家や関係者に取材を重ね、当事者の声を中心に「少年マガジン」の創刊から「半世紀の歴史」をたどってみた。

『あしたのジョー』には、なぜヒロインが2人いるのか？ 『釣りキチ三平』に両親がいない理由とは？ 80年代を席卷したラブコメの元祖となった作品は？ 人気原作者・樹林伸はなぜ多くのペンネームを使い分けるのか？ など、マンガファンが気になる秘話やトリビアも、それぞれマンガ家や編集者本人の口から語っていただいた。本邦初公開のエピソードも少なくない。

少しでもお楽しみいただければ幸いです。

目次

はじめに 3

第**1**章 「少年マガジン」誕生 1959年 13

日本初の「少年週刊誌」 14

幻に終わった手塚専属計画 19

わずか1カ月半で創刊 23

子ども向けの「総合週刊誌」として 28

創刊号に載っていた作品は 32

第2章 魔球ブームと「W3」事件 1960 - 1965年 35

牧野編集長の誤算 36

エース、ちばてつや登板 38

高校生も読めるリアルな野球マンガ 40

「赤い虫」が消えた 44

優等生ではない主人公 47

マンガの神様、ブチ切れる 51

第3章 第1次黄金時代 1965 - 1970年 57

ついに放たれた豪速球『巨人の星』 58

週刊少年誌初の100万部 63

水と油の横綱コンビ 67

『あしたのジョー』の真実 72

三島由紀夫や寺山修司も愛読 76

「ギャグの革命児」赤塚不二夫 78

宮原さんを殴れ 83

バカボン移籍事件 87

「マガジンの軍神」梶原一騎 89

一流主義と編集部主導式 94

右手にジャーナル、左手にマガジン 101

## 第4章 原点回帰 1970 - 1978年 105

史上最大の問題作 106

王座からの転落 109

遅れてきた大型新人、30歳で上京 113

第  
**5**  
章

**逆風**

**1978 - 1985年**

127

少年たちに「釣りブーム」を起こす  
117

「マンガの神様」との和解  
120

『少年時代』  
124

ラブコメの誕生  
128

あだち充のブレイク  
132

パステルカラーの時代  
136

「少年ジャンプ」独自の方針  
139

『DRAGON BALL』の衝撃  
146

第  
**6**  
章

**24年ぶりの栄冠**

**1986-2000年**

151

「中興の祖」となった編集長

152

リアルなヤンキーマンガ

157

「7つの名を持つ原作者」樹林伸

160

納得できればいつでも書き直す

164

少年誌初の本格ミステリーマンガ

169

王者「ジャンプ」を倒した日

172

第  
**7**  
章

**創刊50年を超えて**

**2001-2009年**

177

「スポ根マンガの金字塔」をリメイク

178

マンガの進化が変えたマンガ家ライフ

182

「好きな作品」を描いてもらうのがベスト

187

「少年マガジン」の明日はどっちだ  
189

**SPECIAL INTERVIEW 「週刊少年マガジン」第11代編集長 栗田宏俊 インタビュー**  
195

五十嵐編集長の言葉に感銘を  
196

編集長になって  
199

複数担当制のメリット  
203

ヤンキーと異世界  
206

連載作品の4割がラブコメに  
209

マガジンらしさとは  
212

発行部数下がっていても好調  
215

週刊少年誌はなくならない  
218

謝辞  
221

主要参考文献  
222





第1章

「少年マガジン」  
誕生

1959年

## 日本初の「少年週刊誌」

人呼んで「鬼の牧野」——。後に講談社を出て、マキノ出版、わかさ出版を設立する牧野武朗は伝説の辣腕編集長である。

「なかよし」「週刊少年マガジン」「週刊少女フレンド」「現代」など、数々の雑誌を創刊。「週刊現代」中興の祖としても名高く、『講談社七十年史』に『週刊現代』の大躍進は、牧野武朗編集長の力に負うところが大きい」とまで記された。梶原一騎の自伝マンガ『男の星座』（画・原田久仁信）にも登場し、梶原自身をモデルにした主人公に「斬れそーな男だ、見るからに……」と言わせている。そんな牧野も「少年マガジン」の創刊編集長は決して本意ではなかったらしい。

当時35歳。少女雑誌「なかよし」の編集長だった牧野が野間省一社長に呼び出されたのは、「皇太子（現・上皇）ご成婚」に向けて日本が沸き立っていた1959（昭和34）年の年明け間もない頃だった。「正月休みが明けてから10日くらい経った頃だったと思います。ええ、社長と私のふたりきりでした」と、取材時には80代半ばになっていた牧野は半世紀前を振り返った。

省一社長は「いよいよ我が社でも週刊誌を出すことになった。大人向けと子ども向け、

2誌を同時に出そうと思っている」と切り出したという。

入社前に2年ほど小学校の教員をしていた経歴もあってか、牧野は「少女クラブ」を振り出しに一貫して児童雑誌ばかり担当させられてきた。この時点でいち早く社長の意図を察し、とっさにこう言い返す。

「社長！ 一兵卒（ヒラの編集者）で結構ですから、私を『大人の週刊誌』のスタッフにしていただけないでしょうか？」

社長は「うーん……」と言ったきり大きな目を伏せ、1分近くも沈黙した後、おもむろに口を開いた。

「それはなかなかいい考えだ。だが、この際、君には『子どもの週刊誌』を担当してもらいたい」

この瞬間、「週刊少年マガジン」初代編集長が決定した。

なぜ『子どもの週刊誌』を任されるのがイヤだったのだろう。そう聞くと「時期尚早だと思っただけです」と牧野は答えた。

「確かに当時は週刊誌がはやっていたが、子どもに週刊誌が求められているとは思えな

った。うまくいくわけがない。それなのに、なぜあえて出そうとしたのか。どうやら、すでに小学館が準備を進めているという情報が入っていたらしいんです。どうせ出すなら、1日でも先に出したいということでしょう」

1956（昭和31）年の「週刊新潮」（新潮社）創刊以来、出版界では空前の週刊誌ブームが起こっていた。翌57年には「週刊女性」（現在は主婦と生活社）、58年には「週刊明星」（集英社）、「女性自身」（光文社）、「週刊大衆」（双葉社）、59年には「週刊現代」（講談社）、「朝日ジャーナル」（朝日新聞社）、「週刊文春」（現・文藝春秋）、「週刊平凡」（現・マガジンハウス）が次々と登場した。

この59年、一気に増えた週刊誌は、総発行部数で月刊誌を上回ることになる。その中に、日本初の少年週刊誌「週刊少年マガジン」と「週刊少年サンデー」（小学館）の姿もあった。週刊誌ブームの背景にはテレビの急速な普及があったと言われる。

NHKがテレビ放送を始めたのは1953（昭和28）年のこと。草創期のテレビは恐ろしく高額だったが、58（昭和33）年に松下電器産業が庶民でも手が届く6万円台のテレビを発売した。皇太子ご成婚を控えた翌59年に入ると、1月にNHK教育テレビ、2月に日

本教育テレビ（現・テレビ朝日）、3月にフジテレビが相次いで開局する。

電通・広告景気年表によると、58年のテレビ普及率はわずか10・4%に過ぎず、まだ中流家庭にテレビはないのが普通だった。それが59年には23・6%、60年には44・7%と1年ごとに倍増していく。このテレビの急速な普及が人々のライフスタイルを変え、出版業界にも大きな影響を与えることになった。

新聞や雑誌などの活字メディアに比べて、テレビの武器はスピード（速報性）だ。また1週間単位で番組が作られることから、日常生活の中で今まで以上に1週間というサイクルが意識された。その結果、出版業界では週刊誌の創刊が大ブームになったというわけだ。そんな中、どこも出していなかった「少年週刊誌」の創刊を初めて企画し、形にしたのは小学館の雑誌部次長だった豊田亀市である。

現在、小学館といえば講談社、集英社とともに日本を代表するマンガ出版社として知られる。ところが意外なことに、1950年代の小学館にはマンガを中心とした子ども向け雑誌は存在しなかった。フラッグシップである「小学一年生」から「小学六年生」に至る学年誌にいくつかマンガは載っていたものの、あくまでオマケ程度の扱いだったらしい。

取材時、やはり傘寿を過ぎていた豊田は「マンガを中心とした雑誌を出すことで、傑出したマンガ家を育てる。それを学年誌で使おうという野心があつたんです」と話し始めた。「学年誌のマンガは面白くなかった。以前から、もっとマンガに力を入れるべきだと考えていました。講談社の社風である『健全な娯楽』という要素を小学館にも取り入れる必要がある。そこで1958（昭和33）年の夏、当時の相賀徹夫社長に『マンガを中心にした少年週刊誌を出したい』と言うと、驚いたことにその場で企画が採用されたんです。さすが社長、と感心しましたよ」

マンガの伝統を持たない小学館が、遅まきながら少年誌に切り込んでいくには他社になり武器が必要になる。思い悩んでいた豊田にひらめいたアイデアが当時の週刊誌ブームだったという。

それまで小学館がマンガに力を入れていなかった理由のひとつとして、集英社の存在も大きかった。もともと集英社はエンターテインメント部門の本を専門に出版するために作られた小学館の子会社である。この頃は社員さえ小学館から出向しており、独自の定期採用が始まるのもこの翌年の59年になってからだった。そのため当時の集英社では、学年誌

よりもマンガが多く、娯楽色の強い「おもしろブック」や「少女ブック」を出していた。前例のない「マンガを中心とした子ども向け週刊誌」だが、二の足を踏んだ牧野と対照的に豊田は成功する自信があつたという。エンターテインメントを任せていた集英社に「週刊少年サンデー」の企画を持っていかなかった理由を聞くと、「いかに兄弟会社とはいえ、ドル箱を渡せないでしょう」と不敵な笑みを見せた。

「僕が『小学六年生』の編集長をしていたとき、2、3歳下の部下に長野規（『週刊少年ジャンプ』初代編集長）がいたんですよ。『誰か集英社に出せ』と言われ、マンガに強かった彼を出してしまったのは僕のミス。『サンデー』を創刊したとき、小学館に残しておくべきだった、と後悔しました」

### 幻に終わった手塚専属計画

創刊に当たって「サンデーは大金を積んで手塚治虫を専属にしようとした」という噂が根強くささやかれている。「有名な伝説だけど本当の話なんだよ」と豊田は打ち明ける。

「学年誌の伝統がある小学館では、そのブランドを壊してはいけませんですよ。親に買ってもらえる雑誌」でないといけないわけ。すると、デッサンの悪いマンガ家は使えない。

インテリジェンスはあればあるほどいい。そして、とにかく面白くなければいけない。そうなると絞られるよね。手塚治虫、横山光輝、寺田ヒロオ。この3人を『サンデー』の柱にしようというのが僕の結論だった。手塚はすでにピークを過ぎていたけど、いちばん人氣があるマンガ家だったし、彼の『マンガの質』は小学館に合っていると思っただんです」

実際、「サンデー」には創刊号から手塚の『スリル博士』と寺田ヒロオの『スポーツマン金太郎』が載っている。「少年」（光文社）に連載された『鉄人28号』で注目を集めていた横山光輝も、すぐには無理だったが、近い将来の連載は約束してくれた。2年後に始まり、全国の少年たちに忍者ブームを巻き起こした『伊賀の影丸』である。

最大の問題は当代ナンバーワンの売れっ子である手塚治虫に、いかにして週刊連載を引き受けさせるかだった。

「マガジン」初代編集長の牧野は言う。

「当時のマンガ家にとって週刊誌の連載というのは未知の世界でしょう。月刊誌なら月に1本だけど、週刊誌は月に何本も描かなければいかん。仕事を頼みにいっても躊躇する人も多かったですよ」

月刊誌は1回当たりのページ数が多いが、月に4冊出る週刊誌の方がトータルのページ数は多くなる。とりわけ後の『ブラック・ジャック』のような一話完結型になると、月に4本の作品を描くことになる。仮にページ数が同じであっても、こちらの方が負担は大きいだろう。多くのマンガ家が二の足を踏むのも無理はない。

まして当時の手塚は「少年」の『鉄腕アトム』をはじめ、『ぼくのそんごくう』（漫画王）、『リボンの騎士（双子の騎士編）』（なかよし）、『スーパー太平記』（少年画報）、『お山の三五郎』（小学三年生）など、豊田が会いに行った1958年秋の時点で10本前後の月刊連載を抱えていた。ほとんどの児童雑誌に描いていた、といっても過言ではない。そのうえ週刊連載などできるわけがない。

どうしても手塚を「サンデー」の看板にしたかった豊田は、彼の毎月の原稿料を計算し、その金額で専属作家にしようと考えた。

つまり現状の原稿料を保障する代わり、「サンデー」以外の連載をすべてやめてもらう、という前代未聞の策だ。自身の月収をも上回る破格の専属料を見せられた相賀徹夫社長も、にっこり笑って許可したという。

結局、豊田の申し出は断られた。

が、断ったのは専属契約だけ。なんと手塚はすべての連載を続けたまま、さらに前人未踏の週刊連載を引き受けたのだ。

「偉いと思ったな。手塚のプライドは金じゃない。連載の本数なんですよ。もっとも広いエリアで、もっとも人氣がなければならぬと。天才ならではの野心だね」

専属契約を断った手塚は、代わりに「週刊誌はサンデーだけ」と豊田に約束したらしい。それでも「少年マガジン」創刊号には「手塚治虫探偵クイズ」というページでクイズを出題し、挿し絵を描いている。また、「マガジン」第2代編集長を務めた井岡芳次によると、「サンデーには内緒で『快傑ハリマオ』を手伝ってもらった」という。

創刊2年目の1960（昭和35）年から始まった『快傑ハリマオ』は、初期の「マガジン」を代表するヒット作のひとつだ。原作は山田克郎、作画は手塚の弟子筋に当たる石森章太郎（後に石ノ森章太郎に改名）だった。

まず原作の台本を手塚に渡し、ネーム（コマ割りをしてラフな絵と台詞を入れた下書き）を入れてもらう。そこに石森がペンを入れ、完成原稿に仕上げた。「サンデー」の手前、「名前を出さない」ことが手塚の出した条件だったという。

ネームを書く、というのはマンガを描くうえで極めて重要な作業だ。人氣絶頂だった頃

の赤塚不二夫はネームまでを書いてペン入れはアシスタントに任せていたというし、後年の本宮ひろ志も自分でペンを入れるのは「人物の顔だけ」と公言している。ペン入れ以上にクリエイティブな工程であり、決して片手間でできる仕事ではないだろう。

なぜそこまでして、と思わずにいられない。常にアンケートの順位を気にし、何歳になっても新人をライバル視したなど、手塚には大家らしからぬ幼児性が感じられるエピソードが多い。あらゆる雑誌に描きたい——。そこには確かに「天才ならではの野心」もあったのかもしれない。

### わずか1カ月半で創刊

1959（昭和34）年1月31日。牧野武朗、井岡芳次、石原和一、岩本文夫、中島信也の5人が講談社の社長室に集められた。ここで彼らは恐るべき社長命令を受け、絶句することになる。

「日本で最初の少年週刊誌になるわけだが、他社でも研究を進めているという情報もある。月刊誌の場合は半年くらいの準備期間で創刊されるのが普通だが、週刊誌は月4回の発行だから、立案期間も4分の1ということを考えてもらいたい！」

新雑誌を創刊するとき、刊行サイクルと準備期間は関係ない。むしろ、いったん動き出したら休む間もなく走り続けなければならない週刊誌の方が、準備期間を長く取ってもいいくらいだろう。

しかし、牧野たちはこの過酷極まりない任務を見事に遂行した。半年の4分の1、この日からきっかり1・5ヵ月後の3月17日に創刊号発売にこぎ着けたのだ。週刊誌の立ち上げとしては、記録的なスピードに違いない。

創刊時のスタッフは15人。第2代編集長になる井岡のほか、第3代の内田勝、第4代の宮原照夫も含まれていた。「なかよし」編集長だった牧野をはじめ、ほとんどは「少年クラブ」や「少女クラブ」など児童雑誌にいたメンバーだ。

「創刊当初は家に帰れないような状況で、会社に泊まり込んだものです。当時は仮眠室がなかったから、編集部に椅子を並べて寝たり、組み立て式のタンカで寝たりね」と井岡。また、牧野も「いくつもの雑誌を創刊しましたが、このときがいちばん苦しかった……。二度とやりたくないですね」と、しみじみと述懐した。

前年秋から準備を進めていたライバルの「少年サンデー」は、当初5月5日の創刊を予

定していたらしい。そこに「少年マガジン」創刊の情報が入り、お互い〃日本初の少年週刊誌〃を目指して熾烈なデッドヒートが繰り広げられた。

「創刊が早まった！ 向こうは3月25日に創刊するらしいです！」

「じゃあ、こっちは22日だ！」

「20日になりました！」

「こっちは19日だ！」

最終的に3月17日の同時創刊に落ちついた。「サンデー」も大変だったと思うが、出遅れた「マガジン」はより苦しかったに違いない。

創刊号の定価は「サンデー」が30円に対し、「マガジン」は40円で10円高かった。井岡芳次はこう説明する。

「この当時、大人の週刊誌の定価が30円だったんですよ。それでサンデーも30円になった。ところが、マガジンは40円。別冊付録が3冊ついたからです」

記念すべき「サンデー」創刊号の表紙は読売ジャイアンツ入団2年目となる若き長嶋茂雄が飾った。隣で長嶋に耳打ちしている少年は大阪（現・阪神）タイガースのユニフォーム

ムを着ており、実際に大阪に住んでいた。巨人軍がキャンプをしていた兵庫県明石市で撮影が行われたという。すでに国民的スターになっていた長嶋に登場してもらったことに加え、黄金カードだった巨人・阪神戦をイメージさせたわけで、細部までしっかり準備していた様子がかがえる。

それに対して「マガジン」の表紙は当時大関の朝汐だった。いくら相撲に人気があったとはいえ少年誌の表紙に力士ということに時代を感じるが、当時でさえ違和感があったらしい。「おかしいよ。いかに創刊を急いだか、ということだろうね」と、「サンデー」の豊田は率直な感想を漏らした。

同じ野球選手では、どうしても人気絶頂の長嶋より見劣りしてしまう。そこで、あえて畑違いの大相撲を選んだわけだ。実際、「マガジン」第2号の表紙は他ならぬ長嶋を起用。力士が登場するのは創刊号だけで、「サンデー」創刊号



『週刊少年サンデー』© 小学館  
創刊号表紙



『週刊少年マガジン』© 講談社  
創刊号表紙

と同じ「プロ野球選手と少年のツーショット」の表紙が2号から6号まで続いている。

手塚治虫をはじめ、寺田ヒロオなど「トキワ荘」に住んでいたマンガ家たちが軒並み「サンデー」に描いたのも、ひとえに「依頼が早かったから」に尽きる。その「出遅れ」が創刊号の表紙にも表れていたわけだ。

藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>（安孫子素雄）はこう言った。

「最初は2月11日に『サンデー』の編集者が訪ねてきました。週刊連載というのは経験がなかったから『どうする?』と藤本（弘）氏（藤子・F・不二雄）と相談したんですけど、なにしろ『日本初の少年週刊誌』でしょう。思い切ってやることにして、その夜、電話して引き受けました。その2日後の13日、『少年クラブ』にいた石原（和一）さんがやって来た。『マガジン』の連載依頼ですよ。牧野さんが『なかよし』の編集長だったとき、僕たちは依頼された別冊付録を丸ごと落として数年間干されたことがある。週刊2本なんてとても無理だから、頭を下げて断ったんです」

創刊のわずか1カ月前のことだ。2月に入ってから動き出した「マガジン」はやむを得ないとしても、「サンデー」の動きも少し遅すぎるように感じる。この時点では、まだ4月の創刊を予定していたのかもしれない。

## 子ども向けの「総合週刊誌」として

「マガジン」も「サンデー」も初期はマンガよりも活字の記事が中心の「総合週刊誌」だった。それは当時の時代背景が大きかったようだ。

まだマンガ自体が未成熟なうえ、今では信じられないほど世間の風当たりが強かったという。児童文学者や教育関係者を中心に、大人たちは一様にマンガを「悪書」「子どもをダメにする有害図書」と決めつけていた。今でもしばしばマンガの性表現が問題になることはあるが、1950年代は内容など関係ない。とにかく「マンガである」だけで俗悪で下品な有害図書とされた。

宮崎克・吉本浩二の『ブラック・ジャック創作秘話』（秋田書店）で、映画監督の大林宣彦が少年時代の忘れられない思い出を語る場面がある。1950（昭和25）年、大林が通っていた広島県尾道市の中学校で「焚書」が行われた。教師やPTAによって回収されたマンガが校庭に積み上げられ、生徒たちの目の前で火が点けられたのだ。今では学校の図書室に収められている手塚作品も大量に含まれていた。

1955（昭和30）年1月、内閣総理大臣だった鳩山一郎が衆議院本会議で「覚醒剤、不良出版物等のはんらんはまことに嘆かわしき事態であります、特にわが国の将来をにな

うべき青少年に対し悪影響を与えていることは、まことに憂慮すべきことであります」と発言。これが大きく報じられた結果、「悪書追放運動」すなわちマンガのバッシングがよいよ盛り上がりつついく。

前に触れたように、「サンデー」を創刊した豊田はもともと「マンガを中心にした少年週刊誌」を考えていた。とはいえ、子どもにマンガを読ませない親など少しも珍しくなかった当時、今のようなマンガ専門誌など考えられなかったらしい。

「サンデー」創刊号の表紙について、『小学館の80年』には「漫画を中心に置きながら、漫画をタブー視する世間への配慮から、表紙を巨人軍の長嶋茂雄とし、一見、スポーツ誌と見まがう体裁としたのである」と、かなり赤裸々に事情が明かされている。

あくまで総合週刊誌だった当初、マンガが占める割合も少なかった。創刊号に掲載されたマンガは「マガジン」「サンデー」ともに6〜7本しかなく、手塚治虫の『スリル博士』（15ページ）と「マガジン」の別冊付録を除けば、すべて10ページに満たない。

本誌の総ページ数は「マガジン」が84ページ、「サンデー」が92ページだった。10円安い「サンデー」の方が少し厚かったわけだが、「マガジン」には3冊も別冊付録（計134ペー

ジ)がっていたので割高感はなかっただろう。

「マガジン」創刊号には、「若乃花か朝汐か?」「がんばれ西鉄・負けるな巨人」「富士山が爆発する?」などのスポーツ・科学記事、川内康範の連載小説『月光仮面』、この年巨人軍に入団した王貞治の「ぼくの野球日記」、長嶋茂雄の「長嶋選手の野球教室(打撃編)」、前述した「手塚治虫探偵クイズ(フジペット・カメラが千台あたる)」といった記事が並んでいる。

ターゲットは小学校高学年になっていた団塊の世代。創刊時のキャッチコピーは「ゆめと希望の少年マガジン」というものだった。

目次が載った17ページの上段には「創刊おめでとう」と題して、顔写真入りで子どもに人気の著名人4名のコメントが並んでいる。なかなか興味深いので全文引用しておこう。

創刊おめでとう。諸君はほんとうに幸福です。世の中の動きが手にとるようになる少年週刊誌が、日本ではじめて作られたのですから。ぼくも、この週刊少年マガジンで、これから大いに活躍したいと思います。(大関 朝汐太郎)

世の中がスピード時代になって、月に一度の雑誌では、諸君の知識欲をまんぞくさせることができなくなりました。わたしは、この週刊誌で諸君が、もっとも新しい科学や社会についての知識をえられることを、心から期待しています。（上野動物園園長 古賀忠道）

このスピード時代に、少年諸君のための週刊誌ができたことは、たいへんよろこばしいことです。諸君、大いにこの週刊誌にしたしんで、新しい時代にふさわしい、心とからだの栄養を思うぞんぶん、すいとってください。（巨人軍 川上哲治）

おとなも少年諸君も、一週間が生活の一つの周期であることにかわりはない。おとなが週刊誌を読んでいるのを見たら、諸君も、自分たちの週刊誌をほしくなるであろう。こんど創刊される、この週刊誌が、そういう期待にそうものであってほしい。（京都大学教授・理学博士 湯川秀樹）

事前に雑誌の内容を聞いていなかったのかもしれないが、誰一人としてマンガには触れていない。全員が「子どもの週刊誌ができればいい」という認識しか持っていなかったこ

とがよくわかる。考えてみれば後から創刊された「ビッグコミック」(小学館)や「週刊漫画アクション」(双葉社)などと違い、「週刊少年マガジン」という誌名自体、マンガを思わせる単語はまったく入っていないのだ。この人選とコメントを見れば、いくらマンガに厳しい親でも抵抗なく買いつけてくれただろう。

### 創刊号に載っていた作品は

では気になるマンガ作品はどんなものがあつたのか。創刊号に掲載された全タイトルとページ数は次の通りだ。

吉川英治(原作)・忍一兵(画)『左近右近』(8ページ)

高野よしてる『13号発進せよ』(8ページ)

山田えいじ『疾風十字星』(7ページ)

伊東章夫『もん吉くん』(2ページ)

遠藤政治『冒険船長』(8ページ)

吉川英治(原作)・椎名龍治(脚色)・矢野ひろし(画)『天兵童子』(別冊付録)

川口松太郎（原作）・内山惣十郎（脚色）・水島順（画）『新吾十番勝負』（別冊付録）

吉川英治の原作が2本もあり、時代ものが中心になっている。後に『ちかいの魔球』や『巨人の星』を載せた「マガジン」なのに、創刊号には「サンデー」の『スポーツマン金太郎』（寺田ヒロオ）のような野球マンガがなかったのは意外だ。これも準備期間が短かったせいかもしれない。

吉川英治とともに初期の「マガジン」の看板作品となっていたのは、高野よしてるの『13号発進せよ』だった。13号はリモコン操縦型のロボットで、操縦する少年は京太郎——とどこかで聞いたような設定だが、創刊号から愛読していたという作家の夢枕獏は「マガジンで最も印象に残る作品」と絶賛。ロボットのデザインも当時としては洗練されている。『鉄人28号』の横山光輝に、こちらは『伊賀の影丸』を描かせる。牧野さんは『鉄人28号』の代わりに『13号発進せよ』。性格の違いが出ているよね」と豊田は指摘する。

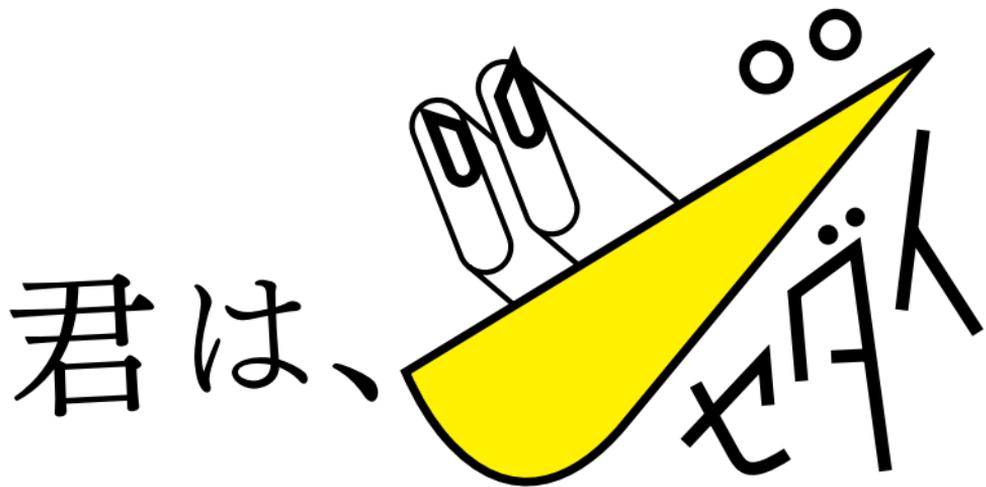
あるいは、この初代編集長だった豊田と牧野の「性格の違い」も、「サンデー」と「マガジン」のカラーに影響したのかもしれない。

創刊号の発行部数は、「サンデー」30万部に対し、「マガジン」は20万5000部と記録

されている。「マガジン」に至っては最盛期の5%にも満たない、ささやかな部数だ。

ちなみにこの1959年の春、ナンバーワンの人気作家だった手塚治虫でさえ30歳を過ぎたばかり。「サンデー」創刊号から活躍したトキワ荘グループ（寺田ヒロオ、藤子不二雄、石森章太郎、赤塚不二夫）は全員20代の若者であり、筆が遅いため「マガジン」の依頼を固辞して「少女クラブ」に全力投球していたちばてつやに至っては、ようやく20歳になったばかりだった。

生まれたばかりの少年週刊誌を支え、やがて巨匠となっていく人気マンガ家たちも、また驚くほど若かったのだ。



# 何と闘うか？ <https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

## ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

## ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

## 星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

# 行動せよ!!!